

「東京新聞」は今年も8月1日から毎日、平和を求めて寄せられた多くの句の中から、作家のいとうせいこう氏と俳人の夏井いつき氏が選んだ「平和の俳句」を掲載している。毎日、楽しみに読んでいる。心に残った句を紹介し、感想を書きたい。

「やめろやめろ戦をやめろ男ども 鈴木ともえ（76）静岡県掛川市」、『殺すな』とただ『殺すな』と声を上ぐ 清水澄子（70）東京都東久留米市」2句に全く同感である。ロシアのプーチンは主権を持つウクライナに軍隊を送り込み、無法な殺戮を展開している。イスラエルのネタニヤフもガザ地区のパレスチナ人をジェノサイドしている。この理不尽な侵攻で、どれほどの人が殺され、生き残っている人も耐え難い苦難を強いられていることか。この暴虐を国際世論で止められないのが残念でならない。プーチンとネタニヤフが戦争を止めたら死者はなくなる。二人の男どもに「やめろ」「殺すな」と大声で叫びたい。

「青空よ赤く染まらないで戦争で 久間木カウエ（16）愛知県豊橋市」高校生が、砲火を受けて青空が赤く染まったテレビの映像を見て、砲火の下には死傷者がいると、平和への思いを詠んだのであろう。広島市の「平和式典」で毎年、子ども代表が「平和の誓い」を読み上げる。今年は、加藤晶さんと石丸優斗さんが読んだ。「色鮮やかな日常を守り、平和をつくっていくのは私たちです。一人一人が相手の話をよく聞くこと。『違い』を『良さ』と捉え、自分の考えを見直すこと。」色鮮やかな日常の平和をつくりたい。そのためには、他人の話を聞いて、「違い」を分裂や敵対ではなく、「良さ」と捉えて見直すことではないかと訴えた。他者尊重の多様性ではないか。このような感性を持ち、平和を求める少年・少女たちがいる。この子たちが平和な日常を生み出す種となる。

「母が言った拳（こぶし）を握るな武器になる 久保良勝（74）愛知県東海市」久保氏の母親は徹底した平和主義者で、それを息子に真っ直ぐに伝えていることに感銘を受けた。この句を読み、沖縄の伊江島で、『命こそ宝』を著した阿波根昌鴻氏が、講演で「土地闘争をする時、手を肩から上にあげてはならない」と語った言葉を思い出した。イエス・キリストは「剣を取る者は皆、剣で滅びる」と言われた。詩編46編11節に「力を捨てよ、知れ/わたしは神（新共同訳）」と歌っている。力を捨てるところに平和が実現する。

「茄子（なす）の馬乗りて来られよガザの精霊 青木節子（68）東京都八王子市」お盆には、茄子や胡瓜の馬に乗って来る死者の霊を迎える仏教的な風習がある。ガザで命を落としたイスラム教徒の精霊に、茄子に乗って来てくださいという句である。無残に殺された人を、宗教を超えて慰めたいという青木氏の思いに胸を打たれ、一日も早い休戦を願う。

「おとすのはばくだんではなくはなのたね 鈴木悠日（はるひ）（8）東京都目黒区」小学2年生の鈴木さんは「爆弾を落とすな」と言う。落とせば、死者が出、街が破壊される。落とすのは「花の種」だと言う。花の種を落とせば、来年きれいな花が咲く。真っ直ぐなこどもの思いを受け止める大人、世界であってほしい。

原爆記念日について一言。広島市は「平和式典」にロシアとベラルーシを招待せず、イスラエルは招いた。これを「二重基準」と批判された。長崎市はイスラエルも招かなかった。これに対し、日本を除くG7の国々はロシアとイスラエルを同列に置く政治的判断だと反発し、大使らは「式典」に出席しなかった。理想は全ての国々を招待すべきだろうが、イスラエルを招けば、反対する市民の抗議によって騒動が起こるかも知れない、また、イスラエルは「核使用」をちらつかせ、脅していた。長崎市の判断を理解し、賛同できる。むしろ、参加を拒否する方が政治判断による偏狭な態度を取っているのではないか。